

頭巾状かぶりもの資料の分析

国立民族学博物館収蔵標本による(5)

山崎 光子

Analysis of Zukin for Headgear: Specimens in the
Museum of Ethnology (5)

Mitsuko Yamazaki

はじめに

布帛製のかぶりものの代表的なものには、頭巾状かぶりもの、帯状かぶりもの、風呂敷状かぶりものがあるが、後二者については前報で報告したのでここでは頭巾状かぶりものについての観察の結果を報告する。この大半はかつてのアチック・ミュージアム収集資料である。

研究方法

研究の方法は前報と同一である。結果のデータを表1に一覧できるようにした。

結果と考察

資料2-1 (品名) カガポーシ

(標本番号) 16361 (衣類F-5-9)

1933年9月28日秋田県由利郡西目町で、アチック・ミュージアムの主宰者渋沢敬三氏によって採集されたもの。同年同月、頭巾状のドモッコ(16362)も同県仙北郡角館町から採集されている。

カガポーシは本来、山形県庄内地方独特のかぶりものと云われ、その名称の由来にも諸説があり²⁾カガッポイ(まぶしい)、冠、影法師からきたのではないか、などがあるがはっきりしない。表生地にかすかにみえる経緯がすりのあるものもこのかぶりものの特徴の一つと云えよう。

まだ新しく布に糊のついたままであり、縫い方も丁寧にしっかりと縫われている。頭頂と額両部の白いかざりじつつけの他、頭部の紐が附図のように白糸で飾り模様でとじつけられてある。

形状は、他の被り物と似ているように見え、後頭部には襦のついた袖形の被りものであるが、よく見ると頭部の短いワの紐や、裾部分の紐など、使い方ははっきりしないものがついている。温海地方のかぶり方は、

当地の佐藤光民氏からお聞きしたところによれば、手拭を併用して、後頭部に丸めた髷を基点にして後頭部と顔を覆面状に覆う昔の女の人の髪型にあわせた特殊なかぶり方なのである。

素材はいずれも木綿布であるが4種の布が用いられている。表面と頭部の紐は、たななどにも用いられる、前述のかすかな経緯緋の入った紺木綿布である。前側は耳のままになっている。

表布はところどころ糸でくくってから紺に染めた糸を、経緯に織り込んでいるので、紺地に白く短い線模様が無造作に並んでいる。縦は均一の間隔で白緋糸を入れて整経しているが、横はほぼ1.2cmごとに白緋入りの糸を入れてある。糸密度は経緯とも(10本/cm)と細かい。

裏側の上半分の頭部には、小柄の黄色まじりの染緋の黒地木綿布をあてている。襦は紺地に3cmほどの井桁の中緋で糸密度は〔経18本/cm〕、〔緯22本/cm〕である。両耳を6.5cmほど内側へ折り、空いた部分に下部の紐の布を捕って袷仕立てにしてある。その下部の短かく太い袋縫いの紐は紺地に赤や黄の糸をとところどころに縦黄に入れてある。着物の端布でもあろうか。

縫い方は右撚りの紺木綿糸1本どりで、袷部分以外は伏せ縫いがしてある。

かざりじつつけは右撚りの太い白木綿糸2本どりで1目おとしに〔7針目/10cm〕でしつけしてある。頭頂後部へその端糸を結んで少しのこしてある。

資料2-2 (品名) ポッチ

(標本番号) 22020 (衣類F-3-4)

1933年10月、秋田県仙北郡雲沢村の武藤敏子氏の寄贈、武藤鉄城氏の採集になるもの、「老婆或いは中老は無地を用いる」と附記されている。

防空頭巾を連想させるかぶりもので、形状は後裾ひろがりになっている。子供用らしい小ぶりの防寒頭巾

で、あたたかそうに綿が入っており、メリンスの赤い紐が長く太くつけられている。紐つけの根元には白の絹糸でとじかざりがつけてあるが、赤い紐は虫がついてボロボロになっている。内側にも赤い細い紐のつけられていた形跡がある。

表裏とも木綿であるが、表は黒地に赤、白のやや変り平織を入れた大緋、裏は白地に赤のプリント柄である。色は、表の黒は〔N1 (black)〕、裏の赤は〔5 R 4 / 14 (red)〕もちろん合成染料の染めで力織機による織りである。

わた入れ仕立てのため縫い目はみえないが、裏側を0.6 cmほどひかえて丁寧に縫われている。頭部に緑色のとじ糸が、布団のとじ糸と同じように止めてある。赤いメリンスの紐の中心にはやはりメリンスの退紅色の芯布が1枚入っているが、それにも虫喰いのあとがある。

縫い糸も拾仕立てのためよくみえないが、右捻りの細いオレンジ色の糸で縫い、右捻りの黒木綿糸でおさえじつけをしたり、右捻りの黄糸でかざりじつけをしたりしてある。

資料2-3 (品名) ぼうし

〔標本番号〕 21398 (衣類F-4-14)

採集地等は不明であるが、東北地方のものであろう。暖かそうな綿入で、若い女性用のかぶりものかと思われる。

表は黒木綿地に縞模様で裾で深く折り返り、裏頭布に赤い紐がついている。紐は襦袢地のような派手な模様のメリンス地で、幅広く長くついているが虫喰い穴が多い。綿は薄く、とじた跡はない。

形状は、資料2-2のボッチと異り、上下ほとんど同じ幅の長方形である。表布が裏側に深く(23cm)折り返っている。

素材は黒地〔N1 (black)〕木綿に灰〔N5 (gray)〕、薄浅黄〔5.5 Y 7 / 5 (dull yellow)〕の縞があり、着物地の残り布と思われる。縫い方は綿入れと同様で、丁寧に仕立てられている。裏布は赤色の無地木綿で、色は〔5 R 4 / 14 (red)〕、よくひかえてつけられている。

わた入れ仕立てのため縫い目等はみえない。

資料2-4 (品名) 三角帽子

〔標本番号〕 17500 (衣類F-5-13)

1935年10月9日新潟県南蒲原郡見附町大字稲名寺通の真島音吉氏の寄贈を受け岩倉市郎氏が採集したもの。なお寄贈者は異なるが、ふな帽子(17499)も同時に採集されている。次の三角帽子も場所は異なるが同じ日

に採集されている。

資料2-3のぼうしと同じ形であるが、ひとまわり小さく、子供用かもしれない。綿は入っていないが、拾仕立てで裾がついており、裏に綿ネルが用いてあるから、やはり防寒用であろう。紐は細く輪になっている。

素材は平織黒木綿地で、青味黒〔10 B 2 / 2 (bluish black)〕に明るい灰〔N 8 (light gray)〕とにぶ赤〔7.5 R 5 / 10 (dull red)〕の十字の中緋、裏の綿ネルもほとんど同じ色の可愛い帽子である。かぶると三角に見えることからこの名称があるのだろうか。

縫い方、仕立て方は丁寧であるが、裏を表よりひかえて縫わなかったため、一部裏布が表側で見えているところもある。

出来上り幅2.5 cm長さ50 cmの紐は元は青〔5 P B 4 / 2 (blue)〕の鮮やかなモスリンであるが、ほとんど虫喰いで穴があいていて内側の洋服柄の花模様の木綿布だけが残っている。その他、裾も後頭部につけられているがほとんど虫喰いで形をとどめていない。縫い目は拾仕立てのためみえない。

資料2-5 (品名) 三角帽子

〔標本番号〕 17501 (衣類F-5-13)

資料2-4と同様、1935年岩倉市郎氏の採集で新潟県南蒲原郡見附町大字本町亀卵商店、田井卯平氏によって寄贈されたもの。名称は同じ三角帽子であるが、形が若干異なる。表布の材質も朱子織りの絹にちりめんの紐であり、外出用のかぶりものであろう。色は黒、大きさもひとまわり大きく男物かと思われる。色は変色しており、布の傷みもひどい。

形状は、これまでの袖形に加え、後下部に表布と共布の裾が表裏とも三角形についており、特に裾の下部がゆるくカーブしている。裏は0.4 cmひかえて拾仕立てにしてある。縫い方は丁寧である。表布は、前述のように黒色であったが今では暗い黄茶〔2.5 Y 3 / 2 (dark yellow brown)〕の部分が多い。裏は、暗い青味紫〔7.5 P B 2 / 4 (dark bluish purple)〕の平織り木綿で、ほとんど汚れも傷みもないから、あまり使用されずに保存されていたものかもしれない。

紐は着物の残り布であろうか。花菖蒲の模様で、ところどころに金糸が入っている。袋縫いで、内側にはやはり芯が入っているようである。

資料2-6 (品名) 被りもの

〔標本番号〕 16362 (衣類F-5-10)

1938年9月28日秋田県仙北郡角館町で、渋沢敬三氏によって採集されたもので現地名ドモッコである。

頭部は拾仕立てで、単仕立ての裾が前後についており、

眼のあたりだけ出して頭から肩まですっぽり覆うかぶりものである。

形状は、片袖形の頭巾の前後に大きな三角布がそれぞれ2枚ずつはいであるが、裾部分は肩までゆっくり覆うよう分かれている。頭頂部後方が丸くくつてある。表布は大柄の紺緋木綿で、前側の裾だけ模様が異なっている。

色は青味黒〔10B 2/2 (bluish black)〕、白緋は青味灰〔10B 7/2 (light bluish gray)〕、前裾にある花の芯には赤がわずかに入っているが、表側の赤色が退色しているから、かなり着用されたものであろう。裏布は手織りらしい藍染の浅黄木綿〔10B 3/6 (dull blue)〕、であって、これもまだらに退色している。丈夫そうな組紐も汚れている。

縫い方は丁寧であるけれども、特に口の当たる部分などはほつれかけている。その部分は裏側にまた違う緋の当て布で補強がしてある。縫い糸は藍色の左撚りの木綿糸1本で、〔9針目/10cm〕で合わせ縫いのうち〔8針目/10cm〕で伏せ縫いになっている。裾は右撚りの糸で大まかにくけたり折り縫いにしたりしてある。

この角館町からはほかに、このドモッコと同類の形状をもつ標本番号23108の被り物や、角頭巾型の23107の被り物も採集されている(写真参照)。これはいずれも絹製であり江戸の文献に見える北国のともこも頭巾がこれに相当すると思われるが²⁾、ここでは庶民の日常用かぶりものとかかわりがないためはぶいた。

資料2-7 【品名】袖帽子

〔標本番号〕5206 (衣類D-2-9)

長野県下水内郡栄村小赤沢における資料であり、大給近達氏が1976年国立民族学博物館に収蔵している。他の労働着、股引、脚絆、手甲などと合わせて9点で、鈴木牧之の『秋山紀行』で有名になった新潟・長野県境の避村、秋山郷の衣生活の再現のために新たに製作されたものらしい。

真新しい紺木綿でつくられた袖帽子であるが、この形式のものがいつ頃までかぶられていたかは興味深い。

袖帽子の由来には諸説あるが、これは全体の形を袖(巻袖、あるいは裾つき平袖)にみたてての名前であろうか。一見どこから顔が出るのかわからない奇妙な形であるが、資料に顔の出る場所、顎の下の部分など丁寧に表示がある。かぶる時は窮屈であるが、かぶってみると顔がゆったりと出るようにかぶられ、更に下側についた白い糸を熱った紐をしめて顔面を覆うことができるようになっていく。かぶると顎下側に大きな垂れ布が下がる。肩側にはほとんど布は垂れないから、冬

期の防寒用外衣を着た時、前を覆うのに役立つのだろう。日本の衣服は、労働着も含めて前開き形式で衿もとが広く開きがちのため、冬が寒い地方などでは有用なかぶりものといえる。

並幅の布を80cmと150cmほどに裁って、一方を揃えて縫い合わせ、長い方の残りは巻袖のように三角に折り曲げて縫いつけてある。

縫い方は右撚りの黒木綿糸1本どりで、合わせ縫い〔13針目/10cm〕のち、二つ目おとし〔10針目/10cm〕で伏せとじしてある。顔の出る部分は耳のまま折って黒糸2本どりで表側に小さい目を出して折り縫いをし、頭巾の後裾の部分は耳のままであった。

資料2-8 【品名】ブシ

〔標本番号〕16143 (衣類F-5-8)

この資料は現地名ブシで、1933年8月5日、A・M 同人によって新潟県岩船郡三面村三面で採集されている。奇妙な形態をしているが、新潟県の県北一帯でかぶられている、目だけ出して覆面にしてかぶる労働用頭巾である。他にオカブリ、ドモコモ、などとも呼ばれている。この地域のブシは、顔がやや大きく出て覆面にかぶらないと云われていたが、昭和のはじめころまでは覆面としてもかぶっていたことを昭和59年9月の現地調査で確かめることができた。

形状は並幅布2枚を横にはいでウとし、一方にひもをつけそこから顔を出す、下部のあご下にあたる部分に三角、あるいは台形の裾をつける。古い藍染布縹色〔10B 4/8 (blue)〕を用いて作られ、さらによく使用されているため黄変し、また破れ、布端はボロボロになっているが、繕ったりしながら、激しい労働にかぶりつけてきた様子がみられる。裾の布と裏側の繕い布と口辺部のへりとり布は合成染料によるにぶ青〔5PB 3/4 (dull blue)〕でこれもきたなく退色している。

材質は本体は手織りらしい木綿で糸密度は経〔20本/cm〕、緯〔18本/cm〕で、裏側の頭部分の当布はさらに粗い平織藍染木綿である。

縫い方は、右撚りの紺糸1本どりで丁寧に0.6cm幅に三つ折り縫いなどした部分も残っているが、大半は右撚りの太い木綿糸で粗くつろい刺してある。紐は茶と紺の縞木綿がこれもあとから雑につけてある。

資料2-9 【品名】ドウモコウモ

〔標本番号〕19567 (衣類F-4-7)

広島県広島市江波町の被りもので、1937年9月、結城次郎氏から寄贈されている。

白茶〔7.5 Y R 7/4 (pale yellow brown)〕の

格子柄の薄手ネルを筒状に縫ったものである。何度も使い洗ったのか、よれよれになっている。

ドゥモコウモの名称は、語源からみてもどうにでもこうにでも意のままに扱れるからであろう³⁾。新潟市の五十嵐浜ではこれと同じ形のもので、くびまきと称して扱られている。カムチャッカへ漁に行きって做ってきたもので、首に巻いたり、縮めて帽子状にかぶったり、覆面状にかぶり目だけ出したりしている。この資料も地域からみて同様に、漁に出た人達によってもたらされ

たものであろうか。

広幅の耳をそのまま端に使い、ミシンで袋縫いにしてある。出来上りの縫い代は1cmとなっている。用尺は広幅で65cmと少なく、縫い方も簡単で、男性でもたやすくつくられる便利なかぶりものである。

総 括

頭巾状かぶりものの代表とも云える、この着物の袖形をした袖頭巾状かぶりものは、大きく形状分類をす

表1. 頭巾状(縦袖形▲, 横袖形△)かぶりもののデータ一覧表

項目	No	2-1	2-2	2-3	2-4	2-5	2-6	2-7	2-8	2-9
		カガポーシ (カガポーシ)	ボ ッ チ (ボ ッ チ)	ぼ う し (ボ ウ シ)	三角帽子 (三角帽子)	三角帽子	被りもの (ドモッコ)	袖 帽 子 (ブ シン)	ブ シン (ドゥモコウモ)	ドゥモコウモ (ドゥモコウモ)
採集地	採集地	秋田・西目	秋田・雲沢		新潟・見附	新潟・見附	秋田・角館	長野・栄	新潟・三河	広島・広島
形状分類		縦 袖 形					横 袖 型			
仕立て方		単(裏)	綿入れ	綿入れ	袷	袷	単(裏)	単	単(裏)	単
接ぎ布の枚数幅		4	3	3	4	3	4	1	4	1
寸法	丈 cm	61	53	61	60	63	50	70	50	32
	幅 cm	24	30	32	25	44	82	67	73	78
	重なるの枚数	2	2(ワタ)	2(ワタ)	2	2	2	2	2	2
材質		木 綿	木 綿	木 綿	木 綿	絹(裏・木綿)	木 綿	木 綿	木 綿	綿ネル
組織		平 織	平 織	平 織	平 織	朱子織	平 織	平 織	平 織	平 織
糸密度	経 本/cm	10 18	21	36	23	細 かい	16	22	20	18
	緯 本/cm	10 22	22	26	20		20	19	18	17
厚 さ mm		0.62	3.4	3.1	1.75	0.62	0.62	0.52	0.45	0.66
色	表	紺	黒赤 地白	黒地に灰薄	灰薄に黒味	黒地に赤	黒	紺	紺	縹 色
	裏	黒地に黄	白地に赤の染模様	赤	にお赤	黒	浅黄		にお青	
織, 染, 柄, 等		細かい緋	大 緋	縞	十字緋	無 地	大 緋	無 地	無 地	格 子
縫い糸・縫い方	材質	木 綿					木 綿	木 綿	木 綿	
	燃り	S					Z	S	S	ミシン縫い
	色	紺					藍	黒	紺	
	本数	1	綿入れ	綿入れ	袷	袷	1	2	1	
	縫い代cm						1.2	1.5	0.6	
	縫い方	一部袷仕立て					合わせ伏	合わせせ	折り伏せ	
縫い目針目/10cm						9 8	13 10	16		
布幅 cm		36	36	36	28	36	34	36.5	33	65
推定用布 cm		124	118	150	130	180	177	190	182	広幅 78
重 さ g		152	191	168	144	159	160	133	126	39

ると縦袖形頭巾と横袖形頭巾に分かれる。前者の用途は防寒用が多く、後者は主として覆面かぶりものである。

1. 資料の情報

a. 縦袖形頭巾(資料2-1, 2, 3, 4, 5, 6)

- 呼称はポッチ, ボウシ, 三角帽子, ドモッコなど帽子の名の附されているものが多い。カガボーンはかぶり方を若干異にするが, 形状が似ているためここに含めた。
- 採集地は前報の図1かぶりもの資料の採集地にみられるように, 秋田県と新潟県であり, 日本海岸の雪国地帯にかぎられている。
- 採集年は昭和8年, 2点, 10年, 2点, 13年, 1点と古い。

b. 横袖形頭巾(資料2-7, 8, 9)

- 呼称は袖帽子, プシ, ドウモコウモなどである。ドウモコウモについては本文中で述べたが, プシの呼び方は帽子からきていると思われる。
- 採集地は前報の図1にみられるように新潟県, 長野県, 広島県と点数は少ないが各地に散在している。これは縦袖形頭巾と異なり防寒用ではなく労働用かぶりものためであろう。もっとも長野の資料は新潟県境のものであり, 広島市のものは近年のかぶりものと思われる。
- 採集時期は昭和8年と12年で, 昭和51年のものは複製品であろう。

2. 形状, 寸法等は図1~4, 表1に示した通りである。

- 形状は縦袖形と横袖形であるが, その丈と幅の長さの寸法をグラフに示すと前報の図2-縦横の長さからみたかぶりもの形態分類-のように横袖形の方が幅が広いが, いずれも裾が各所についているため両者の差異は比較的少ない。
- 仕立て方は縦袖形は綿入れ2点, 袷仕立て2点と防寒向きのものが多いが, 資料2-1, 2-6など単仕立ての裏つきのものは, 横袖頭巾と同様労働用で, 頭部の補強のための裏あて布かと思われる。布の厚さは綿入れは当然厚いが, しかし3mm程度であった。

3. 素材は防寒用も含めて大半は平織の木綿布である。資料2-9の綿ネルは漁撈用のためであろう。糸密度は表1に示したようにそれぞれ若干異なる。

- 色・柄は他のかぶりものに比べて表布, 裏布, 紐とも多様である。労働用衣類一般は藍染の紺一色であることが多いが, 縦袖形頭巾は婦女子の冬期の日常用かぶりものためか多くは華やかな色彩のかぶりものとなった。

4. 縫い方はそれぞれの仕立て方に従って縫われており, ここでは綿入れや袷仕立てのため縫い代や縫い糸は見えにくかった。

- 裁ち方は, 図1~4にも推定図を示したが, 縦袖形は並幅布を頭部で折ってウにしている。横袖形は, 並幅布の耳部分を長く2枚はいで頭部にもっていく方法と, 縦袖形と同様に頭部をウに折った布を横に2枚はぐ方法があり, ここでもその両者の裁ち方があった。広幅布をウにした資料2-9は前にも述べたが, 比較的時代の新しいもので特殊型といえよう。
- 表布の推定用布は裾の量などによって異なるが, かぶりもの本体の丈が60cm前後と共通しているため, 並幅で120cmから190cm位の範囲内の用尺であった。
- 重さも特殊形の資料2-9を除けば120~190gの範囲内で, 綿入れが厚さに比して軽く, 防寒の役を果たしていることがわかる。

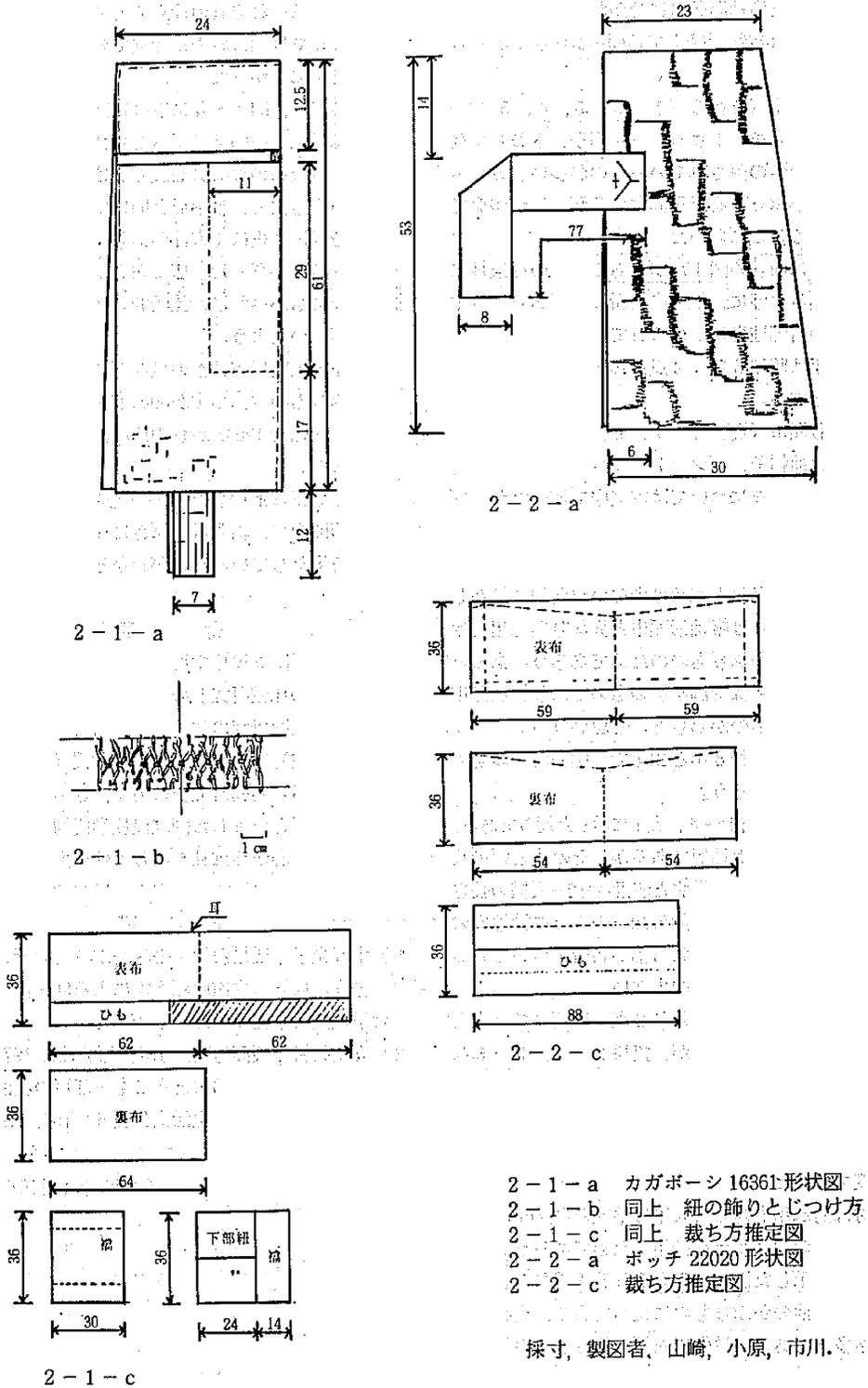
謝 辞

この報告は国立民族学博物館の共同研究「日本在来の労働衣服の比較研究」の成果の一部である。御指導頂きました共同研究の代表者の中村俊亀智教授(国立民族学博物館), ならびに西村綴子教授(岡山大学)をはじめとする各共同研究員の方々, さらには資料の利用に御協力下さいました国立民族学博物館情報管理施設の方々に, 心から御礼を申し上げます。

文 献

- 1) 山崎光子; 風呂敷状・带状かぶりもの資料の分析 - 国立民族学博物館収蔵標本による(4) -。県立新潟女子短期大学紀要, No. 22, 1985.
- 2) 守屋馨村; 覆面考料。131, 源流社, 1979.
- 3) 山崎光子; 覆面頭巾ともこも - 江戸の覆面と東北日本海沿岸の覆面。生活文化史5, 106, 1984.
- 4) 同上, 102.

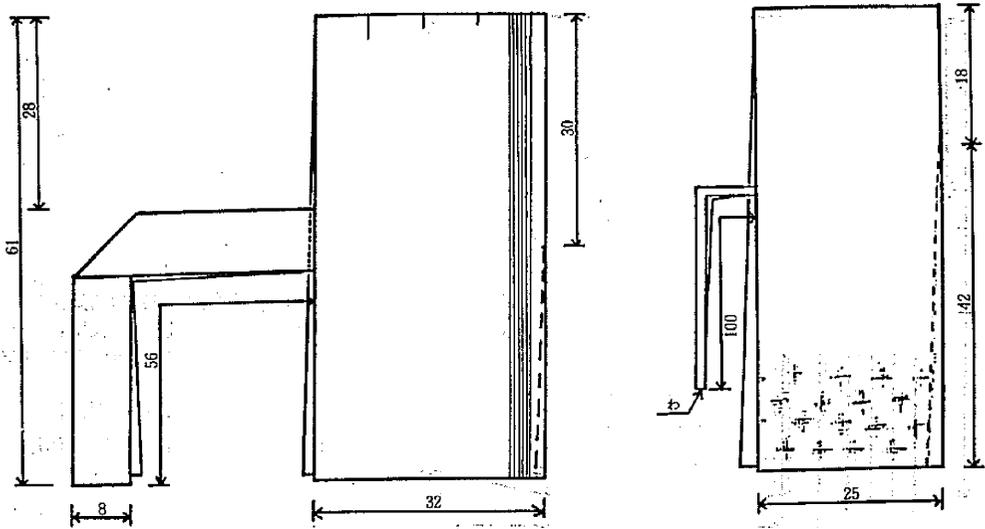
(1985年1月16日受理)



2-1-a カガボシ 16361 形状図
 2-1-b 同上 紐の飾りとじつけ方
 2-1-c 同上 裁ち方推定図
 2-2-a ポッチ 22020 形状図
 2-2-c 裁ち方推定図

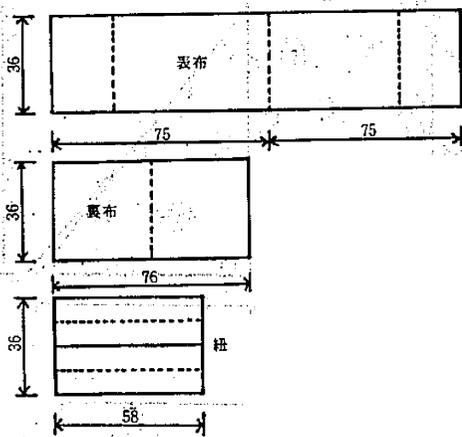
採寸、製図者、山崎、小原、市川。

図 1

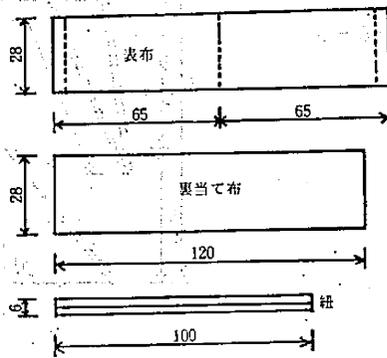


2-3-a

2-4-a



2-3-c

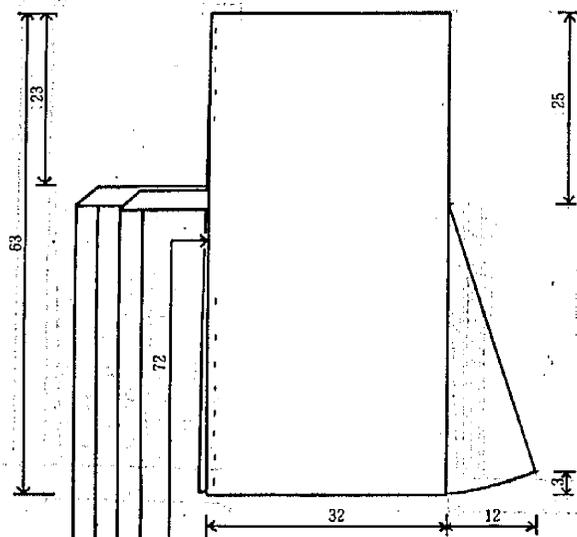


2-4-c

2-3-a ぼうし (ボウシ) 21398 形状図
2-3-c 同上 裁ち方推定図

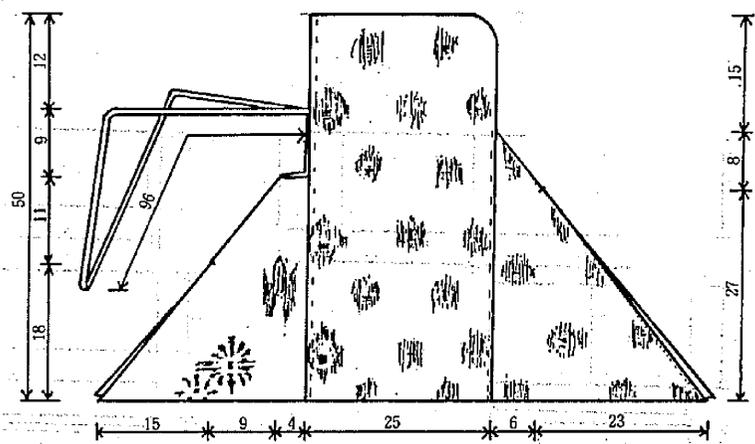
2-4-a 三角帽子 (三角帽子) 17500 形状図
2-4-c 同上 裁ち方推定図

採寸, 製図者: 山崎, 武田, 市川.

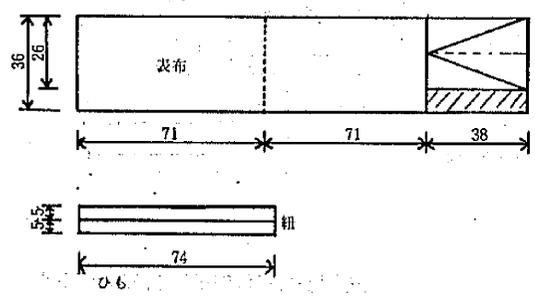


2-5-a

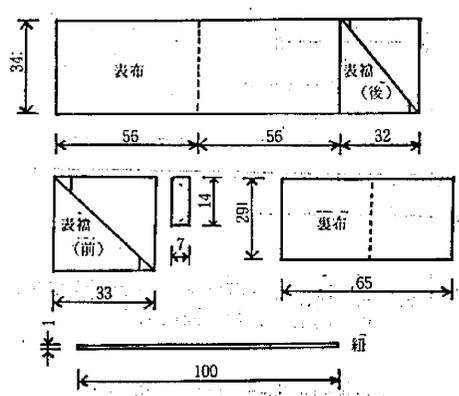
- 2-5-a 三角帽子 17501 形状図
 - 2-5-c 同上 裁ち方推定図
 - 2-6-a 被りもの (トモッコ) 16362 形状図
 - 2-6-c 同上 裁ち方推定図
- 採寸: 製図者, 山崎, 長井, 市川.



2-6-a



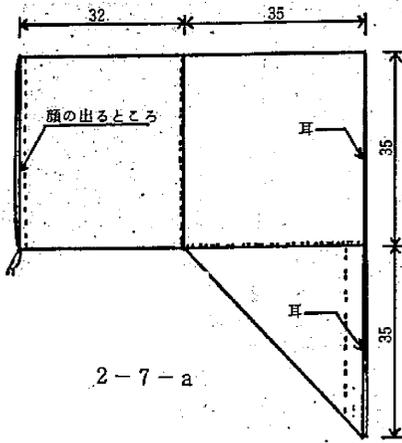
2-5-c



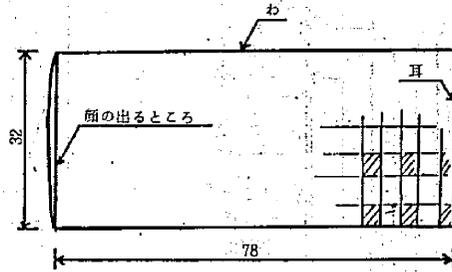
2-6-c

図 3

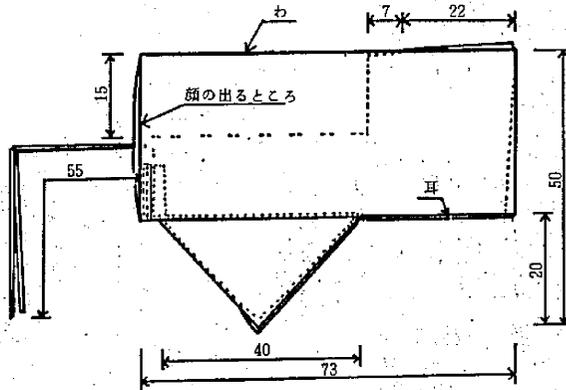
頭巾状かぶりもの資料の分析



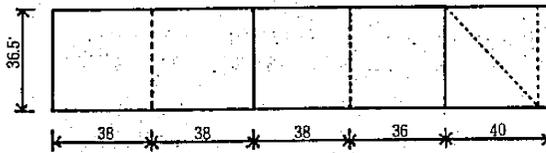
2-7-a



2-9-c

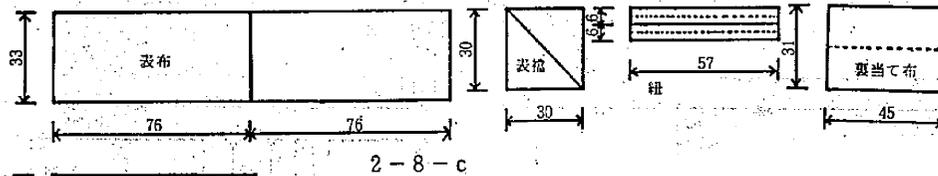


2-8-a

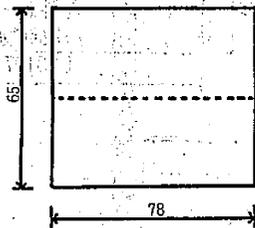


紐 3mm幅×75cm

2-7-c



2-8-c



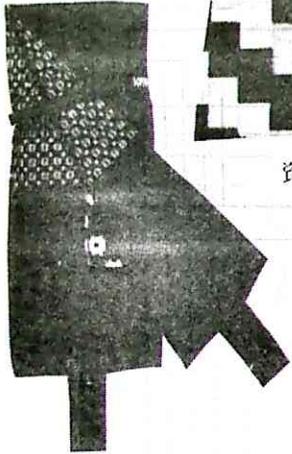
2-9-a

- 2-7-a 袖帽子 5206 形状図
- 2-7-c 同上 裁ち方推定図
- 2-8-a プシ (プシ) 16143 形状図
- 2-8-c 同上 裁ち方推定図
- 2-9-a ドウモコウモ (ドウモコウモ) 19567 形状図
- 2-9-c 同上 裁ち方推定図

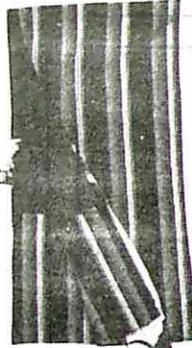
採寸、製図者、山崎、柴山、市川。

図4

資料2-1
カガポーシ
〔16361〕



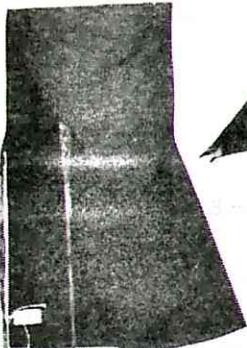
資料2-2
ポッチ
〔22020〕



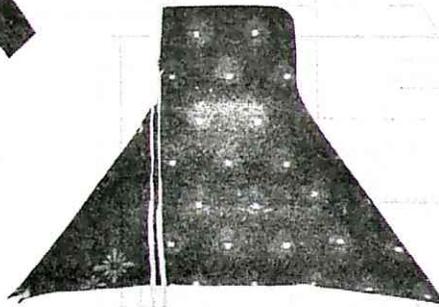
資料2-3
ぼうし
〔21398〕



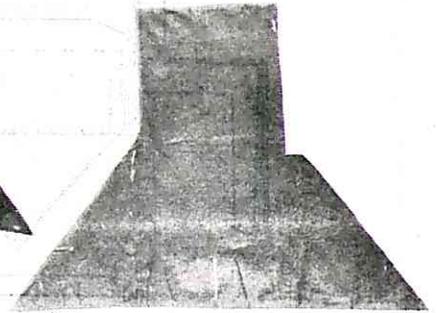
資料2-4
三角帽子
〔17500〕



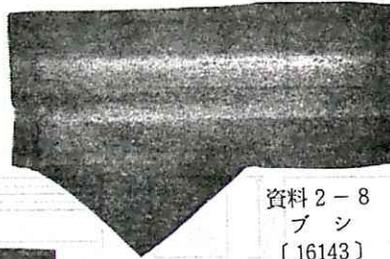
資料2-5
三角帽子
〔17501〕



資料2-6
トモッコ
〔16362〕



資料2-6'
被り物
〔23108〕



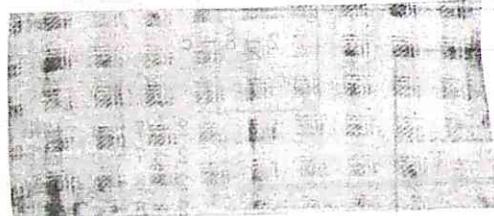
資料2-8
ブシ
〔16143〕



資料2-6''
被り物
〔23107〕



資料2-7
袖帽子
〔5206〕



資料2-9
ドウモコウモ
〔19567〕

写真1